

日蓮大聖人御書全集

によせつしゆぎようしよ

如説修行抄

新版  
599  
〜  
605

によせつしゆぎようしよう

# 如説修行抄

ぶんえい ねん ぶん がつ さい もんかいちどう

文永10年(73) 5月 52歳 門下一同

そ おも まつぼうる ふ とき しょう ど う

夫れ以んみれば、末法流布の時、生をこの土に受け、こ

きよう しん ひと によらい ざいせ みたおんしつ おんしつ

の経を信ぜん人は、如来の在世より「猶多怨嫉（なおお怨嫉

おお なんはなは み そうろう

多し）」の難甚だしかるべしと見えて候なり。

ゆえ ざいせ のうけ しゆ ほとけ だし だいぼさつ

その故は、在世は、能化の主は仏なり、弟子また大菩薩・

あらかん にんてん ししゆ はちぶ にんびにんとう

阿羅漢なり。人天・四衆・八部・人非人等なりといえども、

じようきじようよう ほけきよう き たも おんしつおお

調機調養して法華経を聞かしめ給う、なおお怨嫉多し。いか

まつぼういま とぎ きよう き じこくとうらい

にいわんや、末法今の時は、教・機・時刻当来すといえど

も、その師しを尋たずぬれば凡ぼん師しなり、弟子でしまた鬪とう諍じよう堅けん固こ・

びやくほうおんもつ さんどくごうじよう あくにんとう ゆえ ぜんし おんり

白法びやくほう隱いん没ぼつ・三毒さんどく強盛ごうじようの悪人あくにん等とうなり。故ゆえに、善師ぜんしをば遠離おんりし、

あくし しんごん うえ しんじつ ほけきよう によせつしゆぎよう ぎようじや

悪師あくしには親近しんごんす。その上うえ、真実しんじつの法華ほけきよう經ぎようの如說によせつしゆぎよう修行ぎようじやの行者ぎようじや

してい だんな さんるい てきじんけつじよう

の師弟してい だんな・檀那だんなとならんには、三類さんるいの敵人てきじん決定けつじようせり。

きよう ちようもん はじ ひ おも さだ

されば、この經きようを聽聞ちようもんし始めはじん日ひより思おもい定さだむべし。

きようめつどい めつど のち だいなん さんるいはなは

「況滅度きようめつどい後めつど（いわんや滅度めつどして後のちをや）」の大難だいなんの三類さんるい甚はなはだ

わ でしとう なか か ちようもん

しかるべしと。しかるに、我が弟子等わ でしとうの中なかにも、兼かねて聽聞ちようもん

だいししよう なんきた ととき いまはじ おどろ きも

せしかども、大小だいししようの難なん來きたる時ときは、今いま始はじめて驚おどろき、肝きもをけ

しんじん やぶ か もう きようもん さき

して信心しんじんを破やぶりぬ。兼かねて申もうさざりけるか、經文きようもんを先さきとし

ゆたおんしつ きようめつどご ちようせきおし

て「猶多怨嫉。況滅度後。況滅度後」と朝夕教えしことは、

よ ところ 追

きず こうむ

これなり。予が、あるいは所をおわれ、あるいは疵を蒙り、

りようど ごかんき こうむ おんごく るごい

あるいは両度の御勘気を蒙って遠国に流罪せらるるを見

き いまはじ おごろ

聞くとともに、今始めて驚くべきにあらざるものをや。

と い によせつしゆぎよう ぎようじゃ げんぜあんのん

問うて云わく、如説修行の行者は「現世安穩」なるべ

なに ゆえ さんるい どうてきさか

し。何が故ぞ三類の強敵盛んならんや。

こた い しゃくそん ほけきよう おん こんどくおう だいなん

答えて云わく、釈尊は法華経の御ために今度九横の大難

あ たも かこ ふきようぼさつ ほけきよう ゆえ じようもく がしやく

に値い給う。過去の不軽菩薩は法華経の故に杖木・瓦石を

こうむ じく どうしよう そざん なが ほうどうさんぞう かお かなやき 当

蒙り、竺の道生は蘇山に流され、法道三蔵は面に火印をあ

てられ、師子尊ししそんじや者は頭こうべをはねられ、天台大師てんだいだいしは南三北七なんさんほくしちに

怨 でんぎようだいし ろくしゆう 憎 たま

あだまれ、伝教大師でんぎようだいしは六宗ろくしゆうにくまれ給えり。これらの

ほとけ ぼさつ だいしようとう ほけきよう ぎようじや だいなん

仏・菩薩・大聖等は、法華経ほけきようの行者ぎようじやとしてしかも大難だいなんに

たま ひとびと によせつしゆぎよう ひと い

あい給えり。これらの人々ひとを如説修行によせつしゆぎようの人と云わずんば、

によせつしゆぎよう ひと たず

いづくにか如説修行によせつしゆぎようの人を尋ねん。

いま よ とうじようけんご びやくほうおんもつ うえ あつこく

しかるに、今の世いまは鬪諍とうじようけんご堅固びやくほうおんもつ・白法うへ隠没あつこくなる上、悪国あくこく・

あくおう あくしん あくみん あ しようほう そむ じゃほう じゃし

悪王あくおう・悪臣あくしん・悪民あくみんのみ有あつて、正法しようほうを背そむいて邪法じゃほう・邪師じゃしを

すうちよう こくど あつきみだ い さんさいしちなんさか お

崇重すうちようすれば、国土こくどに悪鬼あつきみだ乱れ入いつて、三災七難さんさいしちなんさか盛おんに起おこ

れり。

じこく にちれんぶつちよく こうむ

かかる時刻に日蓮仏勅を蒙つてこの土に生まれけるこ

とき ふしよう ほうおう せんじそむ

そ時の不祥なれ。法王の宣旨背きがたければ、経文に任せ

ごんじつにきよう 戦 お くにんく よろい き みようきよう

て権実二教のいくさを起こし、忍辱の鎧を着て、妙教の

つるぎ ひつき いちぶはちかん かんじん みようほうごじ はた さ あ

剣を提げ、一部八巻の肝心・妙法五字の旗を指し上げて、

みけんしんじつ ゆみ 張 しょうじきしやごん や 矧 だいびやくごしや

未顕真実の弓をはり、正直捨権の箭をはげて、大白牛車に

う の ごんもん やぶ

打ち乗つて権門をかつぱと破り、かしこへおしかけ、ここ

ねんぶつ しんごん ぜん りつとう はつしゆう じつしゆう てきじん

へおしよせ、念仏・真言・禅・律等の八宗・十宗の敵人を

責 逃 引 退

せむるに、あるいはにげ、あるいはひきしりぞき、あるい

い どの もの わ でし 責 かえ

は生け取られし者は我が弟子となる。あるいはせめ返し、

落

たぜい

ほうおう

いちにん

ぶぜい

せめおとしすれども、かたきは多勢なり、法王の一人は無勢

いま いた

いくさ

なり。今に至るまで軍やむことなし。

ほつけ しやくぶく

ごんもん

り は

きんげん

つい

「法華の折伏は権門の理を破す」の金言なれば、終に

ごんきよう

ごんもん

やから

いちにん

責

落

ほうおう

けにん

権教・権門の輩を一人もなくせめおとして法王の家人と

てんかばんみん

しよじよういちぶつじよう

な

みようほうひと

はんじよう

なし、天下万民、諸乗一仏乗と成つて妙法独り繁昌せ

とき

ばんみんいちどう

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

ふ

かぜえだ

ん時、万民一同に南無妙法蓮華経と唱え奉らば、吹く風枝

鳴

あめつちくれ

くだ

よ ぎ

のう

よ

をならさず、雨壊を砕かず、代は義・農の世となりて、

こんじよう

ふしよう

さいなん

はら

ちようせい

じゆつ

え

にんぼうとも

今生には不祥の災難を払い、長生の術を得、人法共に

ふろうふし

ことわりあらわ

とき

おのおのごらん

げんぜあんのん

不老不死の理 顕れん時を、各々御覽ぜよ。「現世安穩」

の証文、疑いあるべからざるものなり。

問うて云わく、如説修行の行者と申さんは、いかよう  
に信ずるを申し候べきや。

答えて云わく、当世日本国中の諸人一同に、「如説修行

の人と申し候は、諸乗一仏乗と開会しぬればいずれの

法も皆法華經にして勝劣・浅深あることなし。念仏を申す

も、真言を持つも、禪を修行するも、総じて一切の諸經な

らびに仏菩薩の御名を持って唱うるも皆法華經なりと信ず

るが、如説修行の人とは云われ候なり」等云々。



よ い

予が云わく、しからず。詮せんずるところ、仏法ぶつぽうを修行しゆぎようせん

ひと ことば もち

には人の言を用いるべからず。ただ仰あおいで仏の金言きんげんを

守

まぼるべきなり。

われ ほんし しゃかによらい

我らが本師・釈迦如来は、初成道の始めより法華を説か

おぼ

しゆじよう きこんみじゆく

んと思しめししかども、衆生の機根未熟なりしかば、まず

ごんきよう

ほうべん

しじゆうよねん

あいだ と

のち

しんじつ

権教たる方便を四十余年が間説いて、後に真実たる

ほけきよう

と

たま

きよう

じよぶん

むりようぎきよう

法華経を説かせ給いしなり。この経の序分・無量義経にし

ごんじつにきよう

榜

示

さ

ほうべん

しんじつ

わ

たま

て、権実二教のほうじを指して、方便・真実を分け給えり。

ほうべんりき

しじゆうよねん

しんじつ

あらわ

いわゆる「方便力をもつて、四十余年にはいまだ真実を顕

さず、これなり。大莊嚴等の八万の大士、施権・開権・廃権

とう

だいしやうごんとう

はちまん

だいじ

せごん

かいごん

はいごん

等のいわれを心得分け給いて、領解して言わく「法華已前の

りやつこうしゆぎやうとう

しよきやう

つい

むじやうぼだい

じやう

え

歴劫修行等の諸経は、終に無上菩提を成ずることを得

もう

切

たま

ず」と申しきり給いぬ。

のち

しやうしゆう

ほつけ

いた

せそん

ほうひさ

しかして後、正宗の法華に至つて、「世尊は法久しくし

のち

かなら

まさ

しんじつ

と

と

たま

はじ

て後、要ず当に真実を説きたもうべし」と説き給いしを始

にな

さんな

ほとけ

ほうべん

せつ

のぞ

めとして、「二無くまた三無し。仏の方便の説を除く」

しやうじき

ほうべん

す

ないし

よきやう

いちげ

う

「正直に方便を捨つ」「乃至、余経の一偈をも受けざれ」

いまし

たま

と禁め給えり。

い

いちぶつじよう

あ

みようほう

これより已後は、「ただ一仏乗のみ有り」の妙法のみ

いっさいしゆじよう

ほとけ

だいほう

ほけきよう

ほか

しよきよう

一切衆生を仏になす大法にて、法華経より外の諸経は

いちぶん

とくやく

まつほう

いま

かくしや

一分の得益もあるまじきに、末法の今の学者、「いずれも

によらい

せつきよう

みなとくどう

おも

如来の説教なれば、皆得道あるべし」と思つて、あるいは

しんごん

ねんぶつ

ぜんしゆう

さんろん

ほつそう

くしや

真言、あるいは念仏、あるいは禅宗・三論・法相・俱舎・

じようじつ

りつとう

しよしゆう

しよきよう

と

ど

しん

成実・律等の諸宗・諸経を取り取りに信ずるなり。かく

ひと

ひとしん

きよう

きぼう

のごとき人をば、「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば、

すなわ

いっさいせけん

ぶつしゆ

だん

ないし

ひと

みようじゆう

即ち一切世間の仏種を断ぜん乃至その人は命終して、

あびごく

い

さだ

たま

阿鼻獄に入らん」と定め給えり。

掟

みようきよう

もと

いちぶん

違

これらのおきての明鏡を本として一分もたがえず「た

いちじよう

ほう

あ

しん

によせつしゆぎよう

ひと

ほとけ

だ一乗の法のみ有り」と信ずるを、如説修行の人とは、仏

さだ

たま

は定めさせ給えり。

なん

い

ほうべんごんきよう

しよきよう

しよぶつ

しん

難じて云わく、さように方便権教たる諸経・諸仏を信ず

ほけきよう

い

いつきよう

かぎ

きようもん

るを法華経と云わばこそ、ただ一経に限って、経文のご

ごしゆ

しゆぎよう

凝

あんらくぎようほん

しゆぎよう

とく五種の修行をこらし、安楽行品のごとく修行せんは、

によせつしゆぎよう

もの

い

そうろう

如説修行の者とは云われ候まじきか、いかん。

こた

い

ぶつほう

しゆぎよう

もの

しやうしやくにもん

答えて云わく、およそ仏法を修行せん者は、撰折二門

し

いつさい

きようろん

ふた

い

を知るべきなり。一切の経論、この二つを出でざるなり。

されば、国中の諸学者等、仏法をあらあら学すといえども、

時刻相応の道をしらず。

四節・四季取り取りに替われり。夏は熱く、冬はつめた

く、春は花さき、秋は菓なる。春種子を下ろして秋菓を取

るべし。秋種子を下ろして春菓を取らん、あに取らるべ

けんや。極寒の時は厚き衣は用なり、極熱の夏はなにかせ

ん。涼風は夏の用なり、冬はなにかせん。仏法もまたまた

かくのごとし。小乗の流布して得益あるべき時もあり。権

大乘の流布して得益あるべき時もあり。実教の流布して

こくちゆう しょうくしやとう ぶつぽう 粗々 かく

じこくそうおう どう

しせつ しきと ど か なつ あつ ふゆ 冷

はる はな咲 あき このみ生 はるたね お あきこのみ と

あきたね お はるこのみ と

ごつかん とき あつ ころも ゆう ごくねつ なつ 何

りようふう なつ ゆう ふゆ ぶつぽう

しょうじよう るふ とくやく

だいじよう るふ とくやく じつきよう るふ

ぶつか う とき

しようぞうにせんねん しようじよう

仏果を得べき時もあり。しかるに、正像二千年は小乗・

ごんだいじよう るふ とき まつぼう はじ ごひやくねん じゆんえんいち

権大乘の流布の時なり。末法の始めの五百年には純円一

じつ ほげきよう こうせんるふ とき とき とうじようけんご

実の法華経のみ広宣流布の時なり。この時は、鬪諍堅固・

びやくほうおんもつ とき さだ ごんじつぞうらん みぎり かたきあ とき

白法隠没の時と定めて、権実雑乱の砌なり。敵有る時は

とうじようきゆうせん たも かたきな とき きゆうせんひようじようなに

刀杖弓箭を持つべし。敵無き時は弓箭杖何かせん。

いま とき ごんきようそくじつきよう かたき な いちじようるふ とき

今の時は、権教即実教の敵と成るなり。一乗流布の時は、

ごんきようあ かたき な じつきよう

権教有つて敵と成つてまぎらわしくば、実教よりこれを

せ しょうしやくにもん なか ほげきよう しゃくぶく

責むべし。これを、撰折二門の中には、法華経の折伏と

もつ てんだいい ほつけ しゃくぶく ごんもん り は

申すなり。天台云わく「法華の折伏は権門の理を破す」。

ゆえ

まことに故あるかな。

しょうじゆ

しあんらく

しゆぎよう

いま

ときぎよう

しかるに、撰受たる四安樂の修行を今の時行ずるなら

ふゆたね

お

はるこのみ

もと

もの

にわとり

ば、冬種子を下ろして春菓を求むる者にあらずや。鶏の

あかつき

な

ゆう

よい

な

もつけ

ごんじつぞうらん

とき

暁に鳴くは用なり、宵に鳴くは物怪なり。権実雑乱の時、

ほけきよう

おんかたき

せ

さんりん

と

こ

しょうじゆ

法華經の御敵を責めずして、山林に閉じ籠もり撰受を

しゆぎよう

ほけきようしゆぎよう

とき

うしな

もつけ

修行せんは、あに法華經修行の時を失う物怪にあらずや。

まつぼういま

とき

ほけきよう

しゃくぶく

しゆぎよう

たれ

されば、末法今の時、法華經の折伏の修行をば、誰か

きようもん

ぎよう

たま

たれひと

おわ

しよきよう

經文のごとく行じ給えしぞ。誰人にてても坐せ、「諸經は

むとくどう

だじごく

こんげん

ほけきようひと

じようぶつ

ほう

こえ

無得道、墮地獄の根源、法華經独り成仏の法なり」と、音

お 呼 たま しよしゆう にんぽうとも しゃくぶく

も惜しまずよばわり給いて、諸宗の人法共に折伏して

ごらん さんるい ごうてききた うたが

御覽ぜよ。三類の強敵来らんこと疑いなし。

われ ほんし しゃかによらい さいせはちねん あいだしゃくぶく たも てんだい

我らが本師・釈迦如来は在世八年の間折伏し給う。天台

だいし さんじゆうよねん でんぎようだいし にじゆうよねん いま にちれん にじゆうよねん

大師は三十余年、伝教大師は二十余年、今、日蓮は二十余年

あいだごんり は あいだ だいなん かず し ほとけ くおう

の間権理を破す。その間の大難、数を知らず。仏の九横

なん およ およ し おそ てんだい でんぎよう

の難に及ぶか及ばざるかは知らず。恐らくは、天台・伝教

ほけきよう ゆえ にちれん だいなん あ たま

も、法華経の故に日蓮がごとく大難に値い給いしことなし。

かれ あつく おんしつ りようど ごかんき おんごく

彼はただ悪口・怨嫉ばかりなり。これは両度の御勘気、遠国

るざい たつ くち くび ぎ ごうへ きざとつ ほかあつく

に流罪せられ、竜の口の頸の座、頭の疵等、その外悪口せ



られ、弟子等を流罪せられ、籠に入れられ、檀那の所領を

と でしとう るぎい ろう い だんな しよりよう みうち い だいなん りゆうじゆ

取られ、御内を出だされし、これらの大難には、竜樹・

てんだい でんぎよう およ たも によせつしゆぎよう

天台・伝教も、いかでか及び給うべき。されば、如説修行

ほけきよう ぎようじや さんるい ごうてきう さだ あ

の法華経の行者には、三類の強敵打ち定んで有るべしと知

たま

り給え。

されば、釈尊御入滅の後二千余年が間に、如説修行の

ぎようじや しゃくそん てんだい でんぎよう さんんにん そうら まっぼう

行者は、釈尊・天台・伝教の三人はさておき候いぬ、末法

い にちれん で しだんなとう

に入つては、日蓮ならびに弟子檀那等これなり。

われ によせつしゆぎよう もの しゃくそん てんだい でんぎようとう

我らを如説修行の者といわずば、釈尊・天台・伝教等

さんにん によせつ しゆぎよう ひと

の三人も如説修行の人なるべからず。提婆・瞿伽利・

ぜんししよう こうぼう じかく ちしよう ぜんどう ほうねん りようかんぼうとう すなわ

善星・弘法・慈覚・智証・善導・法然・良觀房等は即ち

ほけきよう ぎようじや い しゃくそん てんだい でんぎよう にちれん

法華經の行者と云われ、釈尊・天台・伝教・日蓮ならび

でしだんな ねんぶつ しんごん ぜん りつとう ぎようじや ほけきよう

に弟子檀那は、念仏・真言・禅・律等の行者なるべし。法華經

ほうべんごんきよう い ねんぶつとう しょきよう かえ ほけきよう

は方便權教と云われ、念仏等の諸經は還つて法華經とな

ひがし にし にし ひがし だいち たも

るべきか。東は西となり西は東となるとも、大地は持つ

そうもくととも と あ てん にちがつ しゆうしゆく

ところの草木共に飛び上がつて天となり、天の日月・星宿

とも おくだ ち 例

は共に落ち下つて地となるためしはありとも、いかでかこ

ことわり

の理あるべき。

あわ

いま

にほんこく

ばんにん

にちれん

でしだんな

哀れなるかな、今、日本国の万人、日蓮ならびに弟子檀那

とう

さんるい

ごうてき

せ

だいく

あ

み

よろこ

わら

等が三類の強敵に責められ大苦に値うを見て悦んで笑う

きのう

ひと

うえ

きよう

み

うえ

にちれん

とも、昨日は人の上、今日は身の上なれば、日蓮ならびに

でしだんなとも

そうろ

いのち

ひかげ

ま

ただいま

弟子檀那共に霜露の命の日影を待つばかりぞかし。只今

ぶっか

かな

じゃつこう

ほんど

こじゆう

じじゆほうらく

とき

なんだち

仏果に叶って寂光の本土に居住して自受法楽せん時、汝等

あびだいじよう

そこ

しず

だいく

あ

とき

われ

が阿鼻大城の底に沈んで大苦に値わん時、我らいかばかり

むざん

おも

なんだち

羨

おも

無慙と思わんずらん、汝等いかばかりうらやましく思わん

ずらん。

いちご

す

一期を過ぐるごと、程も無ければ、いかに強敵重なる

ほど

な

ごうてきかさ

も、ゆめゆめ退する心なかれ、恐るる心なかれ。

たとい頸をばくび 鋸のこぎりにて引き切り、ひ どうをばきひし胴ぼ菱こ矛をも

つてつつき、突 足にはあしほだしを打つて絆きりをもつても錘むとも、揉

命いのちのかよわんほどは、通 南無妙法蓮華経、なんみようほうれんげきよう 南無妙法蓮華経と

唱えて、とな 唱え死じにに死ぬるならば、し 釈迦・多宝・十方の諸仏、しやか 釈迦・多宝・十方の諸仏、たほう 釈迦・多宝・十方の諸仏、じつぼう 釈迦・多宝・十方の諸仏、しよぶつ 釈迦・多宝・十方の諸仏、

霊山会上にして御契約なれば、ちようぜんえじよう 須臾のほどに飛しゆゆび来とつて、きた

手てをとり肩かたに引ひつ懸かけてりようぜん 霊山へは走しり給たまわば、にしよう 一聖・

二天・十羅刹女は受持じゆじの者ものを擁護おうごし、しよてんぜんじん 諸天善神は天蓋てんがいを指さし

旛はたを上げあて我われらを守護しゆごして、じやつこう たしかに寂光ほうせつの宝刹おくへ送たもり給

うべきなり。あらうれしや、あらうれしや。

嬉

ぶんえいじゆうねんみずのととりごがつ

にち

にちれん

かおう

文永十年癸酉五月 日

日蓮

花押

ひとびとおんちゆう

人々御中へ

しよ

おんみ

はな

つね

ごらん

そうろう

この書、御身を離さず常に御覧あるべく候。